座談会

野党共闘で挑むも、争点消失で自公政権継続

第49回衆議院選挙の意味・意義を考える

（司会）相内 俊一
小樽商科大学
特認名誉教授

西依 一憲
北海道新聞社
道政キャップ

山崎 幹根
北海道大学
公共政策大学院教授

山本健太郎
北海学園大学
法学部教授

1　パンデミック下での総選挙、争点は何だったのか

相内　一〇月の衆議院選挙の座談会をはじめます。事前に自治研事務局から議論してほしい内容についてのご提案をいただきましたが、時間的な都合もありすべて取り上げることは不可能です。そこで本日は選挙戦に焦点を当てて、その特徴を挙げていただきながら、選挙結果にどう結びついたのか。さらには今後の展望について議論をしていただきたいと考えています。まず、メディアは今回の選挙をどう見ていたのでしょうか。

事前予測に反して勝利した自公政権　直前の不人気首相交代で最大争点が消失

西依　選挙結果は皆さんご存知のとおり、自民党が少し議席を減らしましたが、二六一議席を得て絶対安定多数となり、公明党も議席を伸ばしました。したがって、与党は当初の予想を覆してまずまずの戦果を納めたのに対して、野党第一党の立憲民主党は小選挙区では議席を伸ばしたものの、比例で議席数を減らし、枝野代表は辞任を余儀なくされる惨敗との結果になりました。また、れいわは多少伸びたものの、共産は議席を減らし、共闘野党と呼ばれるリベラル左派勢力は軒並みダウンとなりました。

その中で、日本維新の会が第三極として存在感を示し、公示前の四倍近い議席を得るに至った。その結果、新しい衆議院の勢力図は維新が第三党の座に就いて、公明よりも大きくなった。それに伴い、立憲民主党と関係の強かった国民民主党が維新の方に近づく動きを見せており、中道右派・保守の新しい塊ができていくのか。あるいは憲法改正の論議が動き始めるのか、そのきっかけとなるかもしれない衆議院選挙になったと言えると思います。

私が取材を通じて感じていたのは、争点が何やらぼんやりしていて、正体が掴みづらいこともあり、記事化することが難しかった選挙でした。北海道

新聞も含め各紙は「コロナと経済が争点」と見出しを付けました。確かに争点ではあったと思いますが、岸田さんが「新しい資本主義」というどちらかと言えばリベラルなキーワードを打ち出して、この時点で与党と野党の分かりやすい対立軸がなくなってしまった。それを有権者も感じていたのではないでしょうか。こうしたことが関心が高まらなかった一つの要因と見ています。

野党が苦杯をなめることになったもう一つの要因は、菅さんの電撃的な退陣劇でしょう。コロナ対応が上手くいかず、内閣支持率も低迷していましたので、今回の衆院選は「菅失政に対する審判が下るものだ」と誰もが思っていました。だからこそ自民党は厳しい戦いになると言われていた。ところが、菅さんが突然、次期総裁選不出馬を明言し、事実上退陣したことで、有権者にとって最大の争点が突然消失する構図となった。

過去の選挙でも明らかなように、無党派層の投票行動が投票率に影響を与えますが、特に今回は「政権にお灸を据えてやろう」「菅ではない人を選んでやろう」という動機を失ってしまった側面があるのではないでしょうか。その結果、低投票率につながり、元々の支持層が厚い与党が勝利を収め、野党は苦戦を強いられたという印象を持ちました。

山崎　自民党は国民が持つ不満の矛先を非常に上手くかわすためいろいろな策を講じ、これが結果的に成功につながったと見ています。西依さんの話と重複しますが、首相交代の効果は大きかった。さらに、変化の雰囲気作りとして自民党総裁選をメディアを利用し展開した上で、解散のタイミングも思ったより早かった。

また、選挙戦の中で自民党側もあえて争点や政策論争を積極的に出しませんでした。あらゆる政党がコロナ対策と景気対策と言えば、政策の差異を明確に出せないということも分かっていたのでしょう。つまり、自民党は戦略で勝利したということです。

対する野党ですが、私は野党共闘について一定の成果があり、共闘していなければもっと大変なことになっていたのではないかと見ています。ただ、立憲民主党はなぜ比例票であれだけ減らしたのか。その原因にはいろいろな要因があるのでしょうが、それについてきちんと分析していかなければなりません。

相内　これまでのご発言をまとめておきましょう。争点としてはコロナ、経済、そして一番大きかったのは菅失政に対する審判だった。ところが、突然の退陣で有権者は批判票を投じる意欲が削がれてしまった。自民党は総裁選を露出させて、評判の悪い菅首相から、素性はよく分からないがマシな岸田首相にイメージチェンジすることで、疑似政権交代効果を生み出し、結果として批判の矛先をかわすことに成功した。

他方、野党について立憲民主党は比例票を減らして敗北したが、野党共闘は一定の成果を上げた。また、維新が第三党になったことで、これからは改憲が問題化してくるということですね。山本先生はどのように見ていますでしょうか。

コロナ患者減で政策争点も消失

山本　有権者が投票行動をする上で、①過去あるいは業績を評価する、②政策や争点の評価という二点から判断すると言われています。ところが、今回はいずれの捉え方もできない選挙だった。西依さんのお言葉を借りるならば、消失したのは菅という過去だけではなくて、政策争点として大きかったコロナ問題も患者の急減によって消えてしまった。私は二〇〇五年の郵政選挙以来、久しぶりに政策争点と過去の業績が連動する選挙になるのかな、と八月くらいまでは思っていたのですが、感染者数の減少などによってコロナという問題は事実上消えてしまい、全くそうはならなかった。

したがって、通常の選挙で我々有権者が判断材料としている過去や業績も評価対象にならず、加えて特定の政策争点も浮かび上がってこないと言う状況が生まれ、空白になってしまった結果、ぼやっとした将来に対する期待というか、将来を誰に託すのが良いのか。あるいはマシなのかを選択する選挙になってしまった。これが今回の選挙の特徴でもあると捉えています。ちなみに、過去を評価するという点で言えば、二〇〇九年以降前回までの総選挙はいずれも過去の業績が大きく問われた選挙でしたから、有権者も何となくそれに慣れていたのは間違いないと思います。

一方で、野党共闘というのは「自民党がダメだから、野党は統一候補を立てました」という過去を評価する選挙戦の構図に合わせて作られていたところがあります。しかしながら、「自民党の代

わりに何をやるか」というメッセージは煮詰まっておらず、あくまでも枠組みをつくることだけが先行した。なので、菅さんが相手であれば自民党以外の選択肢をつくることができたというだけでも、野党共闘がもっと機能した可能性はあったのかもしれません。

首相交代が無かったなら結果は変わっていたか

山本　ただ、個人的に思考実験として関心があるのは、今回のようなコロナ患者が急に減ったような状況下で菅さんが首相のまま衆議院選挙に突入した場合、最初に思われていたほど自民党は負けたのだろうか、ということです。これは完全に反実仮想なので分かりませんが、もしかすると負けなかったかもしれない、という気もしています。実はこの場合、野党は辛かったのではないでしょうか。将来を語れない野党共闘もそうですし、枝野さんという「鮮度」が落ちた方が代表にいたわけで、相当難しかったと思います。

相内　今、コロナ患者が急に減ったような状況で菅首相が残っていて、過去の業績評価を受けた場合どうだったのかという話がありました。データもありませんので、話にくい部分もあるかもしれませんが、皆さんと少し議論できればと思います。

山崎　そもそも与野党ともに主要な政策は似通っており、それもコロナ患者の減少、感染収束で重要度が低下してしまった。さらに景気対策・経済対策もバラマキ合戦で差異化されず、党首の持っているイメージが一定の影響力を持ったのではないかと考えています。したがって、私は菅氏のままで選挙に臨んだ場合、ネガティブイメージに相当引きずられて、大変なことになったと見ています。

西依　やっぱり菅首相で衆院選に望んだら、自民党はもっと大きく減らしていたと思います。確かに選挙戦が展開された一〇月下旬は感染者数も減ってきており、自分がやってきたことは正しかった、という主張はできたでしょうし、それに響く有権者は一定数いたかもしれません。実際、菅さんは地元の選挙区で「コロナ対応、ワクチンも浸透してきて感染者も減った」と実績をアピールしていました。

しかしながら、それまでの過程での場当たり的対応、記者会見にしても政府分科会の尾身会長と一緒にでて、重要なところは尾身会長に投げて、最高責任者としての言葉の重みをきちんと発信することができなかった。これを国民は見ています。名参謀であったかもしれませんが、リーダーとしての質が疑われていたのは間違いありません。

したがって、感染状況を改善したという功績はあっても、リーダーとしてこの人にこれからの日本を託していくという選択は自民党支持層においてもなかったと思います。そういう意味でも、菅さんのままで衆議院選挙に突入した場合、自民党の議席は相当減ったのではないかなという印象を持っています。

相内　確かに、菅内閣の場合は無能なイメージがすごく強かったし、戦略の不在、全ての判断が遅すぎる・決断できないといった資質をずっと言われていた。仮に、コロナが収束したのはワクチン戦略が成功したからだ、と主張しても染みついたイメージは回復できなかったかもしれませんね。先ほど山本先生は枝野代表の鮮度の低さについて言及していましたが、枝野の演説の仕方、メッセージの出し方についてどう見ていますか。

山本　街頭演説などの映像を拝見する限り、枝野さんは他の党首よりも理路整然と演説されていて上手いなという印象を持っています。ただ、これは野党党首の宿命なのでしょうが、有権者の中にはこの四年間、口汚く政権を罵るイメージがずっとリフレインされてしまっていた。したがって、枝野さんの場合、話の中身以前に「この人は文句をギャンギャン言う人だ」ということが染みついていたのではないでしょうか。実際に有権者の感情運動研究のデータを見ても、枝野さんの嫌われ度はかなり高い。野党党首を長い間務めてしまうと、否応なくそういうイメージが染みついてしまうのかもしれません。

経済対策は選挙争点だったのか

相内　なるほど。菅首相の退場で業績選挙もコロナ患者の減少で争点選挙も成り立たないような状況があったという皆さんの見方は分かりました。では、経済は争点だったのでしょうか。

西依　争点になりきれなかった部分があると思います。経済政策といっても前面に出てくるのは

家計への現金給付がもっぱらで、結局はバラマキ合戦になってしまった。財政規律とセットで考えていたのはむしろ自民党と公明党で、野党ほどその感覚は鈍く、だから争点を軸にした与野党の対決構図がぐちゃぐちゃになってしまった印象を持っています。

山本　まさしく西依さんの言うとおりで、消費税の時もそうでしたが、経済政策に対しては野党がバラマキで、選挙戦を政策論争に持っていくのを妨げている大きな要因となったと思います。今ごろになって給付に対する所得制限をする・しないが騒ぎになっていますが、それは選挙戦の中で議論しておかなければならないことであり、終わってからやることではないでしょう。

山崎　今回の選挙は、有権者にとって興味関心が高いであろう消費税減税政策も支持を得られていなかった。こうなったのには恐らく、消費税減税について実現可能性があるのかないのか分からない主張だったからだと見ています。あるいは、国民が本当に望んでいるのは消費税減税ではなく、もっと違うところにケアや手当をしてほしいということだったとも考えられます。

相内　なぜ、バラマキ合戦の中で財源の問題が争点にならなかったのでしょうか。

山崎　財源問題をとやかくいうことが票に結びつかないからだと思います。

西依　与党に対して野党が突っ込むというのが通常パターンだと思いますが、現金給付に関しては野党の方が財源を全く度外視し、裏付けなく大盤振る舞いする公約を訴えていました。中でも際立ったのはれいわです。従来は「与党のバラマキ」を批判する立場にあった野党の多くが財政規律に関してはいい加減なことを言っていた。そもそも財源・財政問題を批判する立ち位置でもなかった、ということではないでしょうか。

日本維新の会への投票要因は何か

山崎　ただし、相内先生がご指摘されたところで、琴線に触れていると思われるのが維新に投票した一定の人たちです。私自身、彼らが発するキーワードは幻想的なものだと思っていますが、維新からは「行政改革」や「身を切る改革」と言ったカッコ付きではありますが実行性がありそうなメッセージが発せられた。世の中や政治にもやもやした人たちからすれば、魅力的なメッセージに聞こえ、だからこそ立憲や野党共闘一派ではなく維新に投票したのではないでしょうか。こうした動きは意外と無視できませんから、これから他党が改革というテーマをどう取り込んでいくのか。大事な宿題ではないかと見ています。

山本　今回の投票行動について詳細な分析はまだ出てきていませんが、一部の速報的データを見る限り、今までに比べて小選挙区と比例区で違う党に入れている人が多いようです。特に都市部を中心に小選挙区では野党統一候補に投票し、比例では維新へという分割投票がかなり見られた。先ほど山崎先生が言われたように、従来民主党が担っていた改革イメージみたいなものは現在、維新しか持っていないので、仕方なく維新に投票するという有権者がそれなりにいたのだろうと思っています。

相内　「身を切る改革」という維新のメッセージの出し方って、かなり巧妙でしたよね。国会議員に対する批判に対し、現実的かどうかは別としても、自分たちの給与を返上する、国会議員の給与を引き下げると言えば、有権者側から見れば何か実効性のあることをしてくれるのではないかというメッセージとなった。しかも、大阪という地方政治の場で自分たちはやってきたという自負、実績があったのも大きかった。

ただそうなると、誰もプライマリーバランスを考えずにバラマキ合戦をしていたのであれば、争点とは言えなかったと思うのですが。結局、今回の選挙争点は山本先生が先ほどおっしゃっていたように「将来の信託先を選ぶしかなかった」ということなのでしょうか。

有権者だけではなく党員の思いも理解していた自民党

山本　それくらいしか有権者が選ぶ基準がなかったのかな、と受けとめています。

山崎　繰り返しになりますが、自民党は争点を積極的には言わなかった。菅氏は別ですが、岸田首相は安倍氏と比べても大胆な改革を訴えて日本を変えていく、あるいは憲法改正といった統治構造改革を前面に出して訴えるわけではなかった。「聞く力」を標榜し、よく分からない「新しい資本主義」が強調されていますけども、捉えどころ

のない政策を淡々と訴えていくところが特徴であるし、自民党全体としてもこうしたやり方で勝てるという戦略があったのかもしれません。

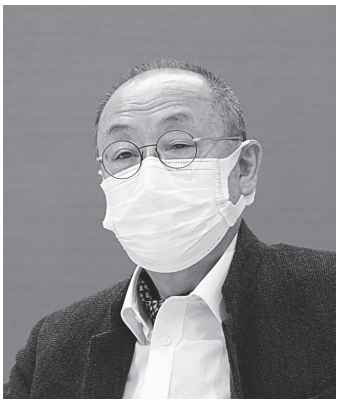
もっと言うと、低投票率で勝ち抜くための選挙戦略が自民党側にあったのではないか、と私は見ています。浮動票の怒りの矛先が投票所へと持って行かせないようにする。そのためにあらゆる手段を行ったことが成功の要因だと思っています。

相内　自民党が無党派層に野党支持に回ってもらいたくないと考えて争点を明確にしなかったとすれば、なぜ自民党支持層は投票したのかという疑問が浮かびます。と言うのは、衆院選に先立ち八月に実施された横浜市長選では、現職の首相が推す候補が落選しています。この時、自民党支持者の中にも「菅首相が推すから投票しない」という動きがあったのでしょうけど、なぜ、新首相になった途端に支持が得られたのでしょうか。

西依　単純に考えると、自民支持層であればこそ、自分たちの党首に対する不満というのも菅さんには向けられていました。それが横浜市長選の惨敗という結果になって、菅さんの首相としての政治生命が一旦絶たれた訳ですが、単純に岸田さんという新しい顔に変わることで、先ほど相内先生がおっしゃっていた疑似政権交代効果が発揮されて、旧来の自民党と同じように危機を乗り越えたということなのだろうと思います。

それ以外にも、具合が悪くなったと言って安倍さんが退陣し、菅さんは党員投票を省略した総裁選を経て選出されましたが、禅譲的な印象が強かった。つまり、自民党員から見れば正統性（レジティマシー）をあまり感じられないままトップになった、という経過があったのだと思います。菅さんが正統性を身につけるためには選挙で勝つ必要性があったのですが、その手前で自爆してしまった。要するに自民党員からすれば、菅さんは総裁として認められていなかったという現れなのではないでしょうか。

相内　適法というか正しい手続きを経て選ばれた人が総裁になったから投票したということですか。



あいうち　としかず　氏

にしより　かずのり　氏

自公の持つ底力を見せつけられた衆議院選挙

山崎　もう一つ、最初から「かなり負けますよ」という事前予測もあったので、自民党の持つ危機意識がかなりあったのではないでしょうか。政権交代まではいかないまでも、報道各社の大半が議席を減らす事前予測をしていましたし、自民党の選挙関係者たちも自ら収集した情報からも負けると感じていたのかもしれません。

逆に言うと、勝つために有らん限りの選挙戦術を展開してきたところもあるし、動員をかけて戦い抜くなど危機意識をバネに選挙戦を展開したと私は見ているのですが、その点について西依さん、現場で取材をしていてどうだったのでしょうか。

西依　やはり投票率が低くなると、無党派層が動かないわけですから、地力が強いところが勝つ。今回そういう結果になったなという印象を持ちました。自民党は圧倒的に地方議会の議員も多いし、支持組織である経済団体、農業団体はあまねくところに張り巡らされていて、それでいていざというときに動きがしっかりしている。

だから山崎先生がおっしゃったように、自民党は危機感を持っていたし、相当力を入れて組織戦を展開していました。自民党だけではなく、公明党の支持母体である創価学会も相当力を入れていましたね。道内では一〇区に公明党の候補者が出ていましたが、これも事前の報道各社の予想では苦戦を伝えられていました。公明党の独自調査で

も神谷さんがかなりリードしているとの結果が出て、創価学会は中央の決定で一〇区に親類がいる、あるいは友達がいる全国の学会員を動員し「稲津を頼む」と昔ながらの電話攻勢選挙を展開した。それが功を奏し、フタを開けてみると予想以上に神谷さんを離して当選しています。ここから言えるのは与党自民党、公明党ともに危機感を強みに変えて、それを活かしたということです。

相内　自公過半数割れを予想したメディアの責任というのはないのでしょうか。

西依　情勢調査の精度については、重く受け止めて検証しなければと思います。

2　野党共闘は成功したのか・失敗だったのか　その功罪を振り返る

与党にとって野党共闘は脅威だったのか

相内　自民党の危機意識というところで言うと、野党共闘による影響はどうなのでしょうか。自民党支持層の中に野党が候補を一本化してくることへの危機感はあったのでしょうか。

山崎　評価が分かれるところで言えば、野党共闘はギリギリで固まるのが遅かったものの、相当危機感はあったと思います。

西依　野党共闘による候補一本化の危機意識は相当強くあったのではないでしょうか。今回の選挙は、非常に接戦区が多かったという特徴があります。ご指摘のように、事前の世論調査を外した部分は多かったと思いますが、非常に読みづらい接戦区が多かったのも事実で、野党が接戦区でもうひと踏ん張りし、票を伸ばしていたら選挙結果は大きく変わっていたと思います。結果として、伸びが足りなかった野党側と、最後は地力でなんとか首の皮一枚で繋がった与党側。地力が勝敗を分けたと思っています。

相内　低投票率の中で、野党共闘は自民党支持層の危機意識を呼び起こし、その危機バネが自民支持を減らさない効果が生んだということでしょうか。

西依　結果的にそういう効果はあったということです。

山本　ただ、接戦区で野党側が勝てなかったのは、先ほどの話に戻りますが、岸田さんへの期待が大きかったのではなくて、「岸田」VS「枝野」で比較した時に「岸田」だったのだと思います。

確かに岸田内閣発足時の支持率は低かったですが、態度未定層が非常に多く、いわゆる様子見の有権者たちが「岸田」VS「枝野」で比べたときに、「様子を見て岸田かな」となった。接戦に影響する無党派層の動きがこうした判断をしたことで、多少自民党が盛り返した、あるいは負けなかった要因だったのではないかと考えています。

相内　そう考えると、首相になりたての岸田にはアドバンテージがあったのではないでしょうか。ざっくりとした「新しい資本主義」という看板を出しましたが、具体的な中身は選挙終わった後に出すと言っていました。仮に首相交代後、半年経ってからの選挙だとバッシングの対象となるのでしょうけど、岸田首相の場合はなったばかりだから仕方ないか、という有権者の受け止め方もあったのではないでしょうか。そういう意味では、枝野氏も岸田氏もイメージだけで比べられていた

やまざき　みきね 氏

やまもと　けんたろう 氏

のかもしれませんね。

それでは、野党共闘は野党支持層に対してどのようなインパクトを与えたのでしょうか。また、野党共闘が成功したのかは別としても、実行されたことは間違いありませんから、この動きが政治構造や選挙のあり方にどのような可能性を持ったのかについて、お聞かせ願えますか。

選挙戦術としての野党共闘と有権者が求めているもの

山本　やはり小選挙区ですから、野党の候補者が乱立するよりはしない方がいいというのは当たり前で、その意味では野党共闘という枠組みそのものは選挙戦術的に合理的な選択であることは間違いないと思います。したがって、選挙の戦い方としての野党共闘は一応完成形を見たと思っています。しかしながら、野党共闘自体が有権者に直接影響を与えることはありません。有権者に影響するのは、この先できあがった政権が何をしてくれるのかであって、候補者の一本化はあくまでスタートラインの手前に立つ話ということになります。

ところが、この四年間、野党はスタートラインにどうやって立つのかばかりに力を注いでいたように見え、メディアもそこに焦点を当てていた。今回の選挙は何とか選挙を戦う態勢こそ整えたものの、その後どう走るのかは見せられなかった。今回の選挙で野党の売りはなんですか、野党は何をアピールしますかと問われた時に「野党共闘で一本化しました」という答えだったように見えたわけですが、有権者から見ると「候補者一本化したからなんなのよ」という印象を持たれてしまうことになったのではないでしょうか。

したがって、これからは候補者一本化に焦点を当てるのではなく、与党の候補と何が違うのか、これから何をしてくれるのかをどう見せるのかが重要だと見ています。現在、立憲民主党では代表選挙を実施していますが（編集部注・一一月三〇日の臨時党大会で泉健太氏が新代表に選出）、誰が代表になっても来年夏の参院選で共産党との野党共闘をどう組み立てるのかが大きく問われてくると思います。ですが、私は野党共闘を「やらない」という選択肢はないと考えています。それは参院選も小選挙区である一人区が主戦場ですから、共闘しなければ自公を利してしまうだけなのでやらざるを得ない。

だからこそ、これからの野党共闘は先ほど申し上げたように、有権者に対してスタートラインに立った先を示さなければならないでしょうし、自公政権に対し変化を起こせる、ということも伝えなければならないのですが、今のところ、それをはっきりとしたかたちで示されていないと感じています。

相内　野党共闘というのは今、山本先生が言ったような小選挙区における選挙戦術、戦略に過ぎないのでしょうか。だとすると、今回の連合会長の発言はどう評価すればよいのでしょう。

山本　大きな声では言えませんが、連合会長の発言は大局的な見地から動かれたというより、これまでの経緯から連合内に根強いとされる共産党に対するアレルギーを代弁しただけにとどまったのではないでしょうか。恐らく、選挙戦術上やるしかないとは分かっていたのでしょうが、なかなか一緒にはできないという感情論が先に立ったのだと思います。

相内　ただ、共産党を閣内に入れる・入れないという報道がなされていましたよね。共産党からは閣外協力するというメッセージが出てきて、枝野もそれはそれでいいというスタンスでした。野党共闘はそこまで話が進んだということではないのでしょうか。

山本　枝野さんとしてはものすごく努力をした姿を見せようとした結果が「閣外協力」だったのでしょう。もっとも、誰がやってもあれが限界だったと思いますし、共産党の姿勢も大きく変わることが期待できない以上、あれくらいが落とし所だったのかなと思っています。

相内　そうなると、立憲民主党から何も言わない方が良かったのではないかと思ってしまいますが。

山本　共産党と関係で、もし政権交代を果たしたらどうなるのか一切触れずに選挙戦を戦うのは無理だったと思いますので、枝野さんの発言はやむを得なかったのだろうと感じています。

相内　枝野代表は「政権選択選挙だ」と言っていました。仮に政権を取ったらどうするつもりだったのでしょうか。

西依　今回枝野さん自身もそこまで想定していなかったのだと思います。今、山本先生がおっ

しゃったように、共産党の方は連携野党として、連立政権を樹立したらこうするというビジョンを積極的に示そうとしていたけども、そこから立憲民主党と連合は逃げていた。枝野さんがギリギリ寄れたのが「限定的な閣外からの協力」という落とし所だったのでしょう。ですが、それすら立憲支持層の中道・保守寄りの人たちからは忌避され、負けたという評価になっています。

私も選挙戦術としての野党共闘は、今更後戻りはできないほど枠組みとして定着しつつあるし、効果もあるのだろうと思っています。今回立憲民主党は小選挙区で九議席伸ばして、比例で二三議席減らしています。したがって、小選挙区の戦術としては明らかに正解です。ただ、党として新しいビジョンを示せないので比例では負けた。正攻法ではないのかもしれませんが、ひとまず戦術においてもう少し狡猾にできるのかを考える余地はあるでしょう。例えば閣外協力など「共闘」の枠組みを打ち出すのではなく、あくまで候補者が被らないように選挙区を棲み分けるということを戦術として徹底していけるのならば、与党として脅威が増すと思います。

野党共闘を継続するには共産党が鍵

西依　立憲民主党の代表選に出ている四人の候補の発言を聞くと、候補の一本化は維持するが共闘のあり方を見直すと言っています。そこから取るべき戦略は、前述したような選挙区の棲み分けなどのテクニカルなところに行くのではないかという気がしています。とは言えこの場合、与党を倒した後にどのような世の中を作るのかビジョンを示さないままの戦術となり、不健康でもありますが。

他方で、立憲民主党と共産党が自公に代わる政権を目指して正攻法で共闘していく道を選ぶなら、さきほど山本先生は「あり得ない」と仰っていましたが、例えば、立憲民主党側が「日米安保破棄や天皇制否定などの主張を変えない限り一緒にできない」とでも伝え、共産党がそれを受け入れるくらいガラッと変わることしか考えられません。共産党が自らの主義主張に手を付けることでもしなければ共闘野党として自公政権を倒すには至らないのではないでしょうか。鍵は共産党にあると考えています。

相内　なるほど。山崎先生はどうですか。

山崎　野党は変に真面目すぎるところがあると感じています。例えば、政策のすりあわせを一生懸命やればやるほどドツボにはまって抜け出せなくなり、結果として政策距離の違いばかりにスポットが当たってしまう。いろいろ議論すればするほど政党間がいがみ合うというイメージが有権者に植え付けられてしまいます。だからこそ、私は政策の大まかな方向性については一致させる一方で、事細かにすり合わせることに過度にエネルギーを費やさない方がいいのではないかと思います。

むしろ、立憲民主党を見ていると、四〇年ぐらい前の社会党が凋落していく時代と重なります。当時は社会党と共産党とで社共共闘だ、いや社公民だ、というように、不毛な政党間共闘の路線問題で行ったり来たりしていましたが、そうではなく、フワッとした風通しのいい世の中を作ろうという気持ちで野党共闘を進めていくのがよいのではないでしょうか。

相内　山崎先生の言われたポイントはすごく重要だと思います。確かに政策のすりあわせをやって、逆に違いを目立たせるような議論ばかりやっている。一方で、政党間の不一致ばかり取り上げているメディアも悪いのでしょうが。

山崎　もちろん、一対一で戦う体制は重要ですが、候補者のパーソナリティというものを前面に押し出して勝ち抜くということもポイントとなってくると考えています。道内で言えば四区の大築さんもそうですし、一一区の石川さんは「党ではなく、人で選んでください」と言って当選した。野党共闘プラス、特に立憲民主党色の強くない人が当選して頑張っていることを踏まえれば、繰り返しになりますが、政策論争を事細かに純化して深めていくことに過度にエネルギーを注ぐことは止めた方がいいと思います。

なぜ野党は自公政権を「野合」と指摘しないのか

山崎　これはずっと感じていたことなのですが、なぜ野党は「自公政権こそ究極の野合だ」と批判しないのでしょうか。あれほど政策距離が離れていた両党があのようなかたちで一緒にやっていることの方がおかしいのではないですか、となぜ切り返さないのか不思議でなりません。

相内　緩やかな連合・連携というのは、とにか

く自民党過半数割れを目指すという意味では野合だろうという指摘があるのは間違いない。そうなると、コバンザメの公明党は一体何なのかという疑問は確かに出てきます。自民党からいくつかの大臣ポストをもらって、うまい汁だけ吸っているだろう、という観点からの批判は可能ですね。

枝野代表が「政権選択選挙だ」と言ったことは間違いだったと思う。政権選択と言いながら、政権を奪取して何をするか、どのような政党間関係を構築するかも何にも決めてなかった。

少しだけ昔話をしたいのですが、五五年体制の頃、新聞報道の見出しはしばしば「次の選挙は与野党伯仲か」「与野党逆転か」でした。要するに与党が過半数割れするかどうかが注目点で、誰も社会党が政権を取るなんて思ってなかった。事実、私が一九七〇年代後半に世論調査をした際、熱心な社会党支持層に対して「社会党が政権をとったら政権担当できると思いますか」と質問したところ「できる」と答えたのは一四％しかおらず、ほとんどの社会党への投票は自民批判票でした。

そう考えると、今回の衆院選は自民党にお灸を据える、暴走を止める。だから与野党逆転選挙だというメッセージの出し方をすれば、争点は明確となり、もう少し野党共闘も支持された、あるいは意味のあるツールだと感じてもらえたのかもしれません。

共産党にとっての野党共闘のメリットは

相内　共産党にとって野党共闘のメリットは何なのでしょうか。野党間で協力して候補一本化を実現すると言った時に、小選挙区の候補を全て立憲民主党にすべきという議論はかなり一方的です。そうなると、小選挙区の候補を立憲民主党の候補で一本化した場合、少なくとも、立憲民主党はそこで譲った政党の比例代表票をある程度支援するような呼びかけをすることが必要だと思うのですが。

西依　それやると立憲民主党支持層のうち、特に中道寄りの人たちが離れてしまうので負けてしまう。実際に取材をしていても、共産党は献身的に立憲民主党を立てて何のメリットがあるのかわかりにくかった。共産党は今まで野党の中でも非常に独自で、孤立した存在だったわけですが、同僚の共産党担当記者から「新しい政権を作る政治運動に自分たちが一員として関われることが本当にうれしいと言っている支持者が多い」と聞きました。末端の支持者は野党共闘によろこびを感じているという側面も実際にあるようです。

相内　それは、野党共闘による選挙戦の中において、共産党は市民権を得たというイメージですか。

西依　そういうことです。党としては、小選挙区で勝ち目がない選挙区を譲っても、そういったムーブメントのプレイヤーになることによって、これまで共産党の方を向いていなかった無党派層を引き付けて、比例票が伸びたらいいね、という思惑があったのだろうと思います。しかしながら、今回の結果を見ると議席も減らしましたし、どうも上手く行っていない。先ほどの話は大げさでしたけども、共産党内でガラッと変わる何かしらの変化を模索していく道もあるのではないかという気がしています。

相内　ちなみに野党共闘と言ったとき、野党の範囲はどこまでを指すのでしょうか。

西依　それは維新を除く各党かと思います。

相内　国民民主党はどうなるのでしょうか。この党の支持基盤も考慮して教えてください。

西依　支持母体は連合の旧同盟系でしょうか。国民民主党も先の選挙までは共闘する野党陣営でしたが、前述のように維新との連携を見せつつあります。ですが、選挙協力というような血肉を伴う結びつきは非常にハードルが高い気がしており、どちらに向かっていくのか注視されると思います。

相内　ということは、連合は分裂するということですか。

西依　内実においてはそうなると思います。

相内　そうですか。今までの話を整理すると、今回の選挙は野党共闘で候補者を当選させることに意義が求められたということになって、女性候補の問題などは重要な意味が無かったように思われるのですが。

山崎　女性候補の擁立は大事なことですが、やり方を失敗したのだと思います。今回、争点がコロナ対策・景気対策と似通ってしまった中で、唯一政党間の姿勢の違いが分かれていた争点が選択的夫婦別姓問題やＬＧＢＴＱでした。有権者にはそうした差異が一定程度届いていたし、本当はもっと届く可能性があったと考えています。しかしながら、その見せ方や語り方をもう少し考えて

いく余地があったのではないでしょうか。

例えば、夫婦別姓になるとこんな働きやすい世の中になる、ＬＧＢＴＱの多様性が認められるとこんな暮らしやすい世の中になる、というようなポジティブなイメージ、政治イメージを具体的に体現しながら、有権者に提示していくことができれば、野党も頑張っていける余地、あるいは立憲民主党を中心とした野党再構築の可能性はあると考えています。逆にこの部分をきちんと有権者に向けて具体化して行かない限り、野党勢力の伸長は厳しいのではないかと感じています。

野党には与党と差別化できる争点が必要

相内　私もＬＧＢＴＱ問題や選択的夫婦別姓問題は、潜在的な争点になりうる可能性があったと思っています。というのも、最高裁判所裁判官の国民審査で選択的夫婦別姓について批判的・反対の立場をとった裁判官だけ「×」がたくさんついた。こうしたデータからも、潜在的争点だったと言えるのではないでしょうか。

山崎　限られたデータではありますが、学生の動向を見ていると意外に選択的夫婦別姓やＬＧＢＴＱを関心事としている傾向がありました。

山本　確かに今回、立憲民主党がはっきり政党カラーを打ち出せた数少ない政策が夫婦別姓に代表されるような多様性の問題だったと思います。この政策は左右の軸や保守・革新などの従来型議論とは別な話なので、新しいファンを獲得できるきっかけとなるという意味では、誤解を招く表現かもしれませんが、有望な一つのツールだと言えると思います。

ただ、今の日本社会を見る限り、中道と呼ばれる多数派の有権者をこの問題だけで自分の党に引き付けられるほど強い論点かと言われると、そうではないのかなと思います。なので、先ほど山崎先生がおっしゃったように、中道の有権者を自民党ではなくこちらに引き付ける際、先ほどの風通しが良い社会といった前向きなメッセージとともにこういった論点を結びつけていくと、たくさんいる中道の有権者を立憲民主党側に引き寄せるきっかけになりうるかもしれない。ですが、現状ではそれは難しいでしょう。

なので、野党共闘といった選挙戦術とは別に、ファンになってくれる可能性が高いような個別の論点をどんどん探してきて、ファンを増やしていくということを日ごろからやっておかなければならないと感じています。

山崎　ただし、夫婦別姓を主張するだけではダメで、夫婦別姓が可能となった世の中がどのように風通しがよく、みんなでゆるく、楽しく、ゆかいに暮らせる世の中になりますよ、というところまで提示していかなければ意味がない。なので、夫婦別姓にプラスして雇用の問題や社会参加の問題、もっと言えば、地方政治のクォータ制の問題なども組み合わせながら進めていかなければならないと思っています。

相内　メディアは選択的夫婦別姓のような、強くはないけれども重要な争点となりうることについてどのように取り上げてきたのでしょうか。

西依　選択的夫婦別姓はコロナ、経済以外の大事な論点、争点の一つでした。記事では各党の訴えをグラフィックを添えて視覚的にも分かりやすく取り上げましたが、例えば五回の連載企画のうち一回で取り上げるといったように必ずしも深掘りしきれなかった面もあり、我々もどうクローズアップしていくか課題を感じながら紙面を作っていました。

今の話の流れで言えば、紙面で気候変動問題をどれくらい提示できるのかについても何度か模索しました。北海道でも太平洋側を中心に赤潮が発生し、身近に感じられる気候変動問題として選挙でも大きな争点となりうると言った現場のレポートを掲載したのですが、やっぱり公示後、洪水のような報道の中では、どこか脇においやってしまったような側面もあり、どこまで浸透したのかという点では自信がありません。

ですが、気候変動問題に関心を持つ若者は多いと感じています。グレタ・トゥンベリさんのような若い象徴的スターもいますし、将来、日本に住み続けられるのか、あるいはSNSで繋がっている外国の友達が住む島が沈んでしまうのでないかなど真剣に考えている。この問題について、共産党は比較的力を入れて訴えていましたが、メディアの多くや政党の多くは主要争点には据えておらず、本気でやろうという姿勢が見えてこない。

若い人の投票率が上がらなかった一つの原因と言えるのではないでしょうか。先ほど山本先生が野党ファンを増やすツールという話をされていましたが、気候変動問題も非常に有望なツールだと思います。

山崎　麻生太郎氏があんなことを言ってくれたので、絶好の機会だったのに生かし切れず、勿体なかったですよね。

相内　ただ、山本先生がご指摘されたように、選択的夫婦別姓やLGBTQといった論点について関心を持つ層は多くはないということも事実だと思います。だからこそ、山崎先生が提言したように多様性や共生からのアプローチ、あるいは先送りしない気候変動問題への取り組みなどを大きな問題に争点化できれば、今回の選挙も違ったのかもしれない。

そのためには今何に取り組むのか。今何を変えるのかといったメッセージが野党側にないと争点にならなかったと思います。本当に野党が支持層に関心を向けてもらう論点とするならば、少なくても何をどうするかについてきっちり議論する必要があった。そういう意味でも若者を引き付けるような、希望を持たせるようなメッセージを政党が出し切れなかったということなのでしょうか。

新しい選挙運動のスタイルを示せなければ政党は脱皮できない

西依　そうだと思います。日本の選挙って真面目すぎてかっこ悪い。アメリカの選挙では支持者が持つボードやグッズもかっこいいですし、お祭り騒ぎとなっているからこそ、自分もコミットしてみようかな、という誘因にはなると思います。日本もそれなりに力のある政党や野党が、旧態依然としたウグイス嬢が手を振るだけの選挙運動を止め、違うやり方を試してみればいいのではないかと感じています。

相内　今回は選挙期間が短かったので、若い人たちに向けたメッセージを出せなかったという言い訳をするのは簡単ですが、こうしたメッセージは選挙の時に考えるのではなくて、通常の政党活動の中できちんと組み立てて、出し続けていなければならないものだと思います。この点から見るならば、野党の実態が露呈したということなのでしょうか。

山本　その点で言うと、個人的には四区の選挙戦が面白かったと思っています。従来の選挙事務所内は「為書き」と呼ばれる激励のポスター前に候補者が座り、勝利あるいは敗戦のインタビューを行うのですが、開票日の大築紅葉さんの選挙事務所は為書きではなく、子どもたちの書いた絵がたくさん貼ってありました。陣営側からはその場所には為書きを貼るべきだ、という声が強くあったようですが、大築さんがそれでは新しい人間が来たことが示せないとこだわり、ずいぶん苦労したということをあるテレビ局の記者から聞きました。

これは象徴的な話で、本来野党は新しいファンを獲得するために新世代に向けて発信しなければならないのですが、選挙戦となると実働部隊となる人たちは、今までのやり方をものすごく強いる部分がある。恐らくそれが効率的だからなのでしょうが、変えることに抵抗感を持っています。

三区の荒井優さんもお父さんと差別化するため

に、若いＩＴ企業などの関係者も入れて、今までの実働部隊と違う選挙をやろうとした。しかしながら、荒井さんも大築さんも小選挙区では負けてしまった。私はこの二人の次回選挙戦について大変注目しています。あくまでも新しいやり方を貫いて、新世代の立憲民主党というのを見せてくれるのか。それとも勝てなかったので、従来のやり方で戦わなければならないだろうという圧力が勝つのか。次の選挙が立憲民主党の新しさを見せていく上で分水嶺になっていくのではないかな、と思って見ています。

相内　なるほど。新しい選挙戦のスタイルという意味で二つの選挙区に着目したわけですか。こうした新しい選挙のスタイルって、報道は取り上げますかね。

西依　新聞というメディアは苦手ですが、テレビは絵になるので好きだと思います。補足するならば、荒井優さんは後半に票が伸びず、お父さんの助言を受けて、結局Ｔシャツを脱いで、スーツを着たという逸話もありました。

相内　余談ですが、荒井聡前議員が最初に立候補した時は学生たちを集めて討論会をしたり、選挙戦も手弁当でやったりして、そういう意味で斬新だなと思ったものです。ところが、次は世襲と聞いてがっかりしました。このような状態で野党は新しい選挙スタイルを進めることができるのでしょうか。

山崎　イベント型選挙や勝手連的運動が成立するには、それだけではなくやはりポスター一枚、ビラ一枚各戸にどれだけ配っていくのか、あるいは立て看板がまちにどれだけ立てられるのか、こうした地道な組織戦や草の根運動が基礎的な力として必要だと感じています。

衆院選後、いくつかの自治体首長と話をする機会を得たのですが、「全然組合が動いていない」「立憲民主党の動きがちぐはぐだ」という話を聞きました。結局、自公政権と戦って勝つには基盤の強さにプラスして新しい選挙スタイルが必要なのではないでしょうか。

山本　とはいえ、組織的に動ける人たちが依然として政治や選挙の主力であって、そこが新規参入のハードルを上げてしまっている大きな要因になっている気がします。いい悪いの問題ではなく、やり方を変えること自体に対する抵抗というのが、政治に携わっている方にとっては圧倒的に強いのではないでしょうか。

ただし、いいトップがいて、空中戦で勝負できる状況だったら旧来とは異なる手法の選挙でも勝ち抜ける候補者がいるかもしれません。残念ながら今回は野党に風が吹いていたわけではないので、組織に頼った選挙をせざるをえなかったという側面もあるでしょう。

相内　皆さんの話を聞いていると、むしろ野党に必要なのは新鮮で魅力的な候補を発掘し育てることなのかもしれません。と言うのは、北海道知事選を見ていても、三年目に入るころになって候補者がいないと騒ぎ出しますが、負けた翌日から候補者を探すことをしていないからこういう問題が起こるわけです。そうならないようにするためには、女性候補者や若い候補、政治家を作り育てていくエリジビリティ・プール（候補者となりうる人材のプール）を整備することなのではないでしょうか。

さらに言えば、エリジビリティ・プールの中で候補者同士が切磋琢磨する環境を作り、新人を地方選挙や地方政治に送り出し、育てながら体験を積ませていく。地方政治で活躍した政治的なスキルをもった人たちが国政に出ていくという長いスパンで候補者擁立の構造改革をしないかぎり、野党はいつまで経っても変わらないのかもしれません。

3　来夏の参議院選挙、今後の政党政治の展望

野党共闘が目指す先は自社さ連立政権のような体制

相内　ここからは展望について議論をしていきたいと思います。野党が支持や得票を集めるのには中道に寄るほど有利と言われていますが、限りなく自民に寄っていくような野党同士で野党共闘が出来たとして本当に意味があるかという疑問があります。あるいは、先ほど山崎先生がおっしゃっていたように、もっと風通しのいい、多様性がしっかりと認められ、民主的な手続が守られて、憲法

も遵守する政治を目指す野党とするのか。これからの野党の見通しや期待についてどう見ていますか。

西依　相内先生がおっしゃるように、中道の票を取らないと政権選択の一翼を担えないのも間違いないと思います。そこで共産党とどう関わっていくのかというのが難しい問題で、立憲民主党が引き続きリーダーとしての地位を保ちながら、どんな風に共産党との間合いを詰めていくのか。あるいは詰めないのか。立憲民主党自体をどう大きくしていくのかは新代表の手腕が問われているのだと思います。

最近、山本先生が書かれた『政界再編』（中公新書）を拝読したのですが、「よりよき統治」というキーワードが書かれていました。イデオロギー的にはA党もB党も違いがない中で、政権交代をするならよりよき統治を求めるのが有権者の心理である、という趣旨で、今後の政党政治はよりよき統治を競うというやり方になっていくのだろうなと感じました。よろしければその延長でご解説いただければと思います。

山本　個人的には、イデオロギーで競う方法には行かないだろうと思っていますし、行かないで欲しい。それをやると固定ファンから抜け出せなくなり、結果として社会党化していくからです。

私も衆議院選挙前まで「民主党」的な政党をもう一度作り直すべきだと考えていたのですが、これからの立憲民主党が目指すべきは自社さ連立政権ではないかと思っています。かつての社会党のように共産党には変わってもらう。かなりの水と油ではありますが、政権を維持するためだけに共通政権を作って、少数意見をうまく政権の中に取り入れながら何となく維持していくのが目指す方向なのではないかと考えています。

先ほどの相内先生の問いかけ答えるならば、第二自民党を目指していく方が政権取る意味では近道なのは間違いありません。その時、有権者に訴えなければならないのは、自公政権より上手く統治できますよ、よりマシですよということを示すことです。そのためには西依さんがおっしゃったのと同様に、共産党に変わってもらわなければならない。だから自社さ連立政権なのです。あの政権は三対二対一の意志決定システムを採用し、割と少数政党に配慮したようなシステムにすることで上手く機能した。

ただし、自社さ連立政権は与党の連立政権だからできた話で、同じことを野党でやるのは矛盾に近い難しい作業だと思います。日ごろから地道に合意を積み重ね、この政党連合に任せればもしかしたら自公よりも上手くやってくれるかもしれない、というイメージを有権者に持ってもらうことが大事なのではないでしょうか。

相内　昔の話が出てきましたね。やはり最後は共産党が鍵ということなのでしょうか。

山崎　あえて切るということにはならないと思います。

相内　でも、共産党を切らないと中道に寄れないと考えている人も結構いるのではないでしょうか。

山本　共産党とどう組むかについて言うならば、共産党が「立憲民主党の言うことを聞くしかない」というくらい立憲民主党の支持が厚くなるような展開に持ち込まなければなりません。ただ、それには時間がかかる。当然、参院選には間に合わないと思いますが、それを進めながら共産党には変化してもらうという非常に狭い道を上手くハンドリングする以外に立憲民主党の再起はないと思います。

山崎　立憲民主党を見ていると、真面目すぎて遊びの部分がなく、盛り上げ方も下手です。立憲民主党代表選挙を見ていても、政策が似通っているのであれば、もう少し人間的な魅力やいままでの実績にも焦点を当てればいいのに、それをしない。また、私がいくつかの自治体首長と話をする中で「ちゃんと頑張っている」という一定の評価、信頼を得ていたのが一一区の石川香織さんでした。赤潮の問題でも動きが早かったと聞いています。野党の人間ですから限界はありますが、地域を回って困りごと、お願いごとを受けとめて、要望を伝えるなどできる限り動いている。

立憲民主党にはこうした優れた人材がいるので、どうやって頑張っているのか、今までのやり方とは違ったやり方で人物にスポットを当てていくと、真面目さにもうちょっと違う色や変化がついて、新規性がでてくるのではないかと思っていますし、期待もしています。

立憲民主党に明日はあるか

相内　なるほど。では、立憲民主党は野党のリー

ダーとなれるのでしょうか。それ以上に立憲民主党に明日はあるのでしょうか。

山崎　立憲民主党が野党リーダーであるべきでしょう。自分たちではありませんと言っては問題です。

西依　可能性はあると思います。

山崎　そのためには今挙げたチェンジをしていくしかありません。新しく選ばれた立憲民主党代表のリーダーシップとイメージ戦略でどれだけ変えられるかというところが大きいとみています。それにプラスして私は地道な組織力、草の根的な運動をもう一回再構築できるかも敢えて大事だと申し添えたいです。

相内　先ほどから山本先生も山崎先生もすごく前向きな提言ですが、それを進めるにはエンジンが必要となります。そのエンジンあるのでしょうか。

山本　よく言われる枝野独裁というか、秘密主義的なトップダウンの党運営では、末端にいる人がどれだけ立憲民主党という「党」を好きになれるのだろうか、という疑問を持っています。その人たちが党を好きになるような政策の作り方をした方がよいのではないでしょうか。自民党に政策を盗まれてしまうと懸念するのも理解できますが、党の一体感を共有することの方が重要でしょう。

これを進める場合、恐らくものすごく時間は掛かるでしょうが、そうしないと結局、何かあると「分裂」という話になりがちなので、皆さんが党を好きになるにはどうしたらいいかをもう少し考えるべきだと外から見ていて思います。

相内　党を好きになるというのはすごく分かりやすい。党を好きになるには、やっぱり政策形成や人事のプロセスの透明性とか、民主的な決定が必要で、そうであれば、自分の意見と違っても皆と議論して決めたらそこに向けて進もうということになります。立憲民主党に足りないのはそうしたガバナンスの問題かもしれませんね。

来夏の参議院選挙にむけて必要なことは

相内　今回の衆議院選挙で起こった野党共闘というムーブメントが参議院選挙まで続くのでしょうか。また、そこで野党共闘が行われた場合の効果についてどう見ていますでしょうか。

西依　難しい質問です。全国で言えば、先ほど山本先生もおっしゃっていたように三二の一人区は一本化するでしょう。したがって、衆議院選挙と同じような構図になる。勝ち負けは来年夏の政治状況によってガラッと変わるでしょうから、今の状況では見通せません。ただ、野党側にすると楽観視は出来ない状況で、野党共闘は途上にあると感じています。

山本　道内と道外で違うと思います。道内は三議席なので、立憲民主党側は現職の鉢呂さんを含め、どのようにして候補者を二人立てるかが問題となると考えています。一方、全国的には一人区が主戦場なので、そこに向けて共闘の体制をなるべく早く組まなければならないというのが今回の教訓ですし、政治状況を好転させるための術を講じる必要がある。したがって、選挙区レベルで必要になることと、党本部で必要となることが重なると思います。

相内　そうすると、どのくらいのスピードで準備が進められるかが勝敗の鍵を握るということでしょうか。

山本　端的に申し上げると、共闘態勢の構築もその先のビジョンの構築のどちらも間に合わないだろうなと思っています。非常に悲観的な話ではありますが、明確な目標はありますので、立憲民主党の新代表がハンドリングできるかに注目しています。

相内　間に合わないだろうという悲観的な意見には私も同感です。今までの政治は上手くいかなかったら「だからダメなんだ」と全て壊してしまう部分があった。これから大事なのは、間に合わないがここまで出来たという前進の度合いについて、感覚や認識を共有することではないでしょうか。

今回はこのあたりで締めましょう。皆さん、長時間の議論ありがとうございました。

本稿は二〇二一年一一月二六日に行った座談会をまとめたものです。　文責・編集部